



朝日新聞 13(H25).3.31

東日本大震災から2年が過ぎた。福島第一原発の事故の責任を誰も取らず、事故原因の追及もうやむやのまま、またごろ原発再稼働への動きが活発になってきた。いつかまた大事故が起きて、やっぱり誰も責任を取らず同じことが繰り返されるに違いない。利権がらみで原発を推進してきた人たちの罪はもろろん重大だが、自分で物事の是非を判断せず

だまされないために

池田 清彦 早稲田大学教授(生物学)

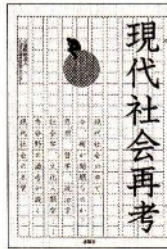


に、不都合が起きたら「だまされた」で済ませてしまう国民にも大いなる責任があるのではないか。

小出裕章・佐高信『原発と日本人——自分を売らない思想』(角川oneteema21)は反原発の旗手2人が、原発を許してきた日本人の「善人の思想」を問いただしたすばらしくスリリングな本である。「私たちに騙された責任、そして二度と騙されない責任がある」との帯のコトバが本書の真骨頂を示している。悪いのはすべて政府や電力会社のせい

で、だまされた国民は何の罪もない無辜の民だ、という構図から抜け出さない限り、この国から原発がなくなることはないのかもしれない。

だまされているのは原発の安全性ばかりではない。中村仁一・近藤誠『どうせ死ぬなら「がん」がいい』(宝島社新書)を読めば、死への恐怖で患者を不安な状態にしてきたがん治療の実態に戦慄を覚えるはずだ。中村さんは老人ホーム付属の診療所長、近藤さんはがんの放射線治療のスペシャリスト。この2人が自



分たちの経験とデータに基づき、がんは特殊なもの以外、放置するのが最善であることを説いている。がん検診は有害であり、がんは治療してもさして延命には役立たず、治療しなければ痛みも少ない、という話は一般の人にとっては衝撃的だろう。

では政府やマスコミの流している情報をうのみにせず、自分の頭で判断するにはどうしたらいいのだろうか。『現代社会再考』(たばこ総合研究センター編、水曜社)は鷲田清一ほか22人の論者がそれぞれの立場から、考えるヒントを述べている。植島啓司さんの文章中の「井の中の蛙大海を知らず、天の深さを知る」というコトバはいいね。大切なのは自由な精神なのだ。